

北海道文教大学 国際学部

2022 (R4) 年度

自己点検・評価報告書

2023 (R5) 年 5 月 10 日

北海道文教大学

基準 1 理念・目的

点検・評価項目① 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

評価の視点 1 学部においては、学部、学科又は課程ごとに、研究科においては、研究科又は専攻ごとに設定する人材育成その他の教育研究上の目的の設定とその内容

評価の視点 2 大学の理念・目的と学部・研究科の目的の関連性

1) 建学の精神

『清正進実』（北海道文教大学・明清高等学校・附属幼稚園の建学の精神）

鶴岡学園の創設者鶴岡新太郎・トシ夫妻の遺された学訓『清く正しく雄々しく進め』を源に、1999（平成 11）年「北海道文教大学」開学へと建学の灯火は引き継がれてきた。その精神は今日も 4 本の柱として、学園に集う皆の心に刻まれている。

その 4 本の柱とは

- ① 真理を探究する清新な知性
- ② 正義に基づく誠実な倫理性
- ③ 未来を拓く進取の精神
- ④ 国民の生活の充実に寄与する実学の精神

我々はこれを要約し『清正進実』と呼び習わし、建学の精神としている。

2) 北海道文教大学の教育理念・目的

豊かな人間性を涵養するため幅広い知識を授けるとともに、理念と実践にわたり深く学術の教育と研究を行い、国際社会の一員として、世界の平和と人類の進歩に貢献し得る人材の育成を目的とする。

3) 北海道文教大学の教育目標

本学園の建学の精神および本学の教育理念の根底を成すのは「未来を拓くチャレンジ精神」である。本学ではこの「未来を拓くチャレンジ精神」の下、実学の創生、伝承の拠点として発展するために中・長期的な目標を以下のように定めている。

- ① 科学的研究に基づく実学の追求
- ② 充実した教養教育の確立
- ③ 国際性の涵養
- ④ 地域社会との連携

国際学部の教育理念と人材育成の目的

国際学部の教育理念と人材育成の目的は、建学の精神並びに北海道文教大学の教育理念・目的に則り、グローバル社会において地域と世界を繋ぐ役割を担う人材を育成するため、国際的な幅広い視点からグローバル社会の課題を発見し、解決する能力と意欲を備えるとともに国際性と人間性を兼ね備えた世界市民として、多様な価値観の人々と積極的に協働し、社会貢献できる人材育成を目的としている。(資料 北海道文教大学学則第1章第3条の2)

国際教養学科では、変化し続ける世界の中で、英語と中国語を中心とした高い言語運用能力を用い、世界の政治や経済を社会科学の視座から分析し、社会現象の本質と情報の真贋を見極めることができる国際教養を身につけ、さらには、世界の社会文化的多様性について確かな理解に基づき、主体的に共生・協働できる、日本と世界を舞台に活躍できる「グローバル人材」の素養を身につけた人材を育成する。同時に、身につけた国際教養を用いて地域の課題を分析し、地域の発展に貢献できる「グローバル人材」の素養のある国際教養人を養成する。

国際コミュニケーション学科では、高い外国語コミュニケーション能力を基礎とし、多文化に対応できる異文化コミュニケーション能力および人と人をつなぐコミュニケーション能力を生かし、世界と日本、特に北海道において多様な社会文化的背景を持った海外からの来訪者をもてなす心・海外と地域の人と人をつなげるための知識を身につけることで、多文化共生社会を構築し、地域の発展に貢献できる高い国際コミュニケーション力を持つ「グローバル人材」の育成を目指している。

教育目標

教育理念と人材育成の目的に基づき、国際学部各学科の教育目標は以下のように定められている。これらの教育目標では高度な専門知識・技術・能力をもつ人材の育成、地域社会への貢献をうたっており、ここに地域に貢献できる実学の追求という、本学の個性が反映している。また、これらは高度な教育を必要とするものであり高等教育機関としてふさわしいものである。

国際教養学科では教育目標を「変化し続ける世界の中で、英語を中心とした高い言語運用能力を用い、世界諸地域の政治や経済に関する知識、学際的教養と国際感覚を培い、自らの頭で社会現象の本質と情報の真贋を問うとともに、深化する社会の多様性の中で、主体的に共生・協働できる「国際教養」を身につけた「国際教養人」を育成する。」と明示している(資料 北海道文教大学学則第1章第3条の2)

国際コミュニケーション学科では教育目標を「国内外、特に国際化が進む北海道において、多様な文化を背景とする人々と共存し幸福を追求することができる「多文化共生社会」の構築に向けて、北海道を立脚点としてその発展に貢献できる「国際コミュニケーション力」を身につけた人材を育成する。」と明示している。(資料 北海道文教大学学則第1章第3条の2)

(2) 長所・特色

国際学部は、世界と地域が直接繋がるグローバル化の時代と予測不能な現代社会が共存する中、しなやかで優しさを持って生きていけるよう、社会現象の本質を見抜く知識を有し、かつ多文化を理解し、またそれに対応できるコミュニケーション能力を有するグローバル人材の素養、そして、国際的な広い視点から世界と地域の課題とその解決を考え、日本と世界両方で活躍することができるグローバル人材の素養の両者を併せ持つ「国際教養人」の育成を目的とする。

2022年度は2年生必修科目である「短期語学研修」において、オーストラリア Southern Cross University にほぼ全員を1か月間、研修に送り出したが、事故なく終了し、学生も大きな学びを得ることができた。また1年生必修科目である「ニセコ国際研修」では、昨年度に引き続きニセコ地域のホテルに研修を受け入れていただくと同時に、富良野地域での交流研修も加わり、学生たちの学びを深めることができた。

(3) 問題点

2022年度は実質、数年ぶりの海外研修ということもあり、事前準備が遅れ、最終的には解決できたとはいえ、関係者が時間的制約の中で仕事をせざるを得なかった側面があったことは問題点として指摘できる。またコロナ禍も継続中であり、大規模なイベントは（先方との関わりという面からも）縮小・中止せざるを得ないこともあった。今後、新たな感染症の脅威も含め、適切な対処を確保するため、現地との情報共有を密にする体制構築を検討している。

基準 4 教育課程・学習成果

点検・評価項目① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

評価の視点1 課程修了にあたって、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果を明示した学位授与方針の適切な設定及び公表

国際学部の所定の課程を修了し、卒業の認定を受けた者には学士(国際学)が授与される。国際学部の学位授与方針(ディプロマポリシー)は、学科ごとに以下のように設定されている。(資料 大学ホームページ 3つのポリシー)

国際教養学科

- ・学術目的の言語使用に主眼をおいた英語及び日本語の高度な運用能力(技能・表現力)を身につけている。(知識・技能)
- ・北海道、日本及び世界諸地域の課題とその分析や解決を考えることのできる、世界諸地域の言語、政治、経済、社会、文化等の国際教養を身につけている。(知識・技能)
- ・北海道、日本及び世界諸地域の課題に対応できる情報処理や分析の能力、論理的・批判的な思考や判断をする能力を身につけている。(思考・判断・表現)
- ・グローバル社会の中で、世界の人々と共生・協働することを可能とする国際性や共感力を備えている。(関心・意欲・態度)
- ・世界と繋がるために地域社会を理解し、その活性化に向けて発信できる国際感覚を身につけている。(関心・意欲・態度)

国際コミュニケーション学科

- ・学術目的の言語使用に主眼をおいた英語及び日本語の高度な運用能力を身につけている。(知識・技能)
- ・世界と地域の視点から、自然環境、社会、文化、歴史等についての高度な専門知識を身につけている。(知識・技能)
- ・北海道、日本及び世界諸地域の課題に対応できる情報処理や分析の能力、論理的・批判的な思考や判断をする能力を身につけている。(思考・判断・表現)
- ・世界各地域の活性化につなげるための異文化コミュニケーション能力を身につけている。(思考・判断・表現)
- ・グローバル社会の中で、世界の人々と共生・協働することを可能とする国際性や柔軟で前向きなコミュニケーション能力を備えている。(関心・意欲・態度)
- ・世界と繋がるために地域社会を理解し、その活性化に向けて発信できる国際感覚を身につけている。(関心・意欲・態度)

国際学部の各学科のディプロマポリシーおよび「教育理念と人材育成の目的」は大学ホームページの最初のページ（大学概要内）に項目を設けて公開しており、ホームページ閲覧者が見つけやすい状態で広く社会に公表されている。

点検・評価項目② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

評価の視点1 下記内容を備えた教育課程の編成・実施方針の設定及び公表

- ・教育課程の体系、教育内容
- ・教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等

評価の視点2 教育課程の編成・実施方針と学位授与方針との適切な連関性

国際学部の「教育課程の基本方針」は以下のようになっている（資料 2022 学生便覧 § 8 履修ガイド p.95）。

- ① 英語をはじめとする外国語教育の強化
- ② 豊かな教養と異文化理解の精神を身につける
- ③ コミュニケーション能力の向上
- ④ 課題解決能力の養成

教育目標達成のために国際学部の教育課程においては「教養科目」「専門科目」を配置している。具体的な教育課程の編成内容は、学科ごとに学生便覧の「教育課程の構成と概要」に明示されている。また、科目区分、必修・選択の別、単位数、配当年次および学期を、北海道文教大学学則別表第2（資料 2022 学生便覧 p133-137、教育職員免許状所要資格取得のための教育科目については p138-140）に明示している。

また国際学部を構成する各学科は教育課程の編成・実施方針（カリキュラムポリシー）を定め、授業科目を構成している。

国際教養学科のカリキュラムポリシー（CP）は次のように定められている。（資料 大学ホームページ 3つのポリシー）

国際教養学科は「グローバル人材」と「グローバル人材」の素養を併せ持つ「国際教養人」の育成のため、「全学共通科目」、「学部共通科目」、「国際教養科目」、「キャリア形成」、「語学研修」、「卒業 研究」を編成します。

①教育内容

（知識・技能）

- ・学術的調査・研究のための英語を学ぶ「国際教養英語」科目群を配置する。

- ・社会科学から見る国際関係を学ぶ「国際政治経済」科目群を配置する。
- ・世界諸地域の文化や社会について学ぶ「国際地域研究」科目群を配置する。

(思考・判断・表現)

- ・地元地域について学び、地域振興や地域貢献、またキャリア意識にもつなげる北海道スタディーズ科目群を配置する。
- ・各学科の専門科目などを通じた学習を基に、自分が専門的に研究するディシプリンを定めた上で参加する「卒業研究プロジェクト I～II」を配置する。

(関心・意欲・態度)

- ・学生の主体的な学びを引き出すために、ニセコ国際研修、短期語学研修、インターンシップ(国内外)、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図る。

②教育方法

- ・人材養成の目的に則して、講義形式の授業の他に、学生の主体的な学びを引き出すために、少人数授業、習熟度別授業、双方向的・学生参加型授業、課題解決・探求型授業、ICTを活用した授業などのアクティブ・ラーニングを実践する。
- ・研修(国内外)、海外留学、インターンシップ(国内外)、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図るなど、教育方法の質的転換を図る。
- ・外国人教員による授業の比率を高め、外国語学修環境を提供する。
- ・学生面談などの授業時間外での学修指導の充実を図る。

③教育評価

- ・シラバスに明示された各科目の到達目標、学修内容、準備学修の内容・時間、成績評価の方法・基準に基づいて客観的に評価する。
- ・海外留学・研修、インターンシップは研修地での評価にもとづき単位認定を行う。

国際コミュニケーション学科のカリキュラムポリシー(CP)は次のように定められている。
(資料 大学ホームページ 3つのポリシー)

国際コミュニケーション学科は「グローバル人材」と「グローバル人材」の素養を併せ持つ「国際教養人」の育成のため、「全学共通科目」、「学部共通科目」、「国際コミュニケーション科目」、「キャリア形成」、「語学研修」、「卒業研究」を編成します。

①教育内容

(知識・技能)

- ・ビジネスや観光場面を中心とした言語使用に焦点をあてた英語と中国語の運用能力の養成のための「言語プロフェッショナル科目」を配置する。
- ・異文化理解力と異文化コミュニケーション力を高める「国際・異文化コミュニケー

ション科目」の2つの科目群を開設する。

(思考・判断・表現)

- ・地元地域について学び、地域振興や地域貢献、またキャリア意識にもつなげる北海道スタディーズ 科目群を配置する。
- ・各学科の専門科目などを通じた学習を基に、自分が専門的に研究するディシプリンを定めた上で参加する「卒業研究プロジェクト I～II」を配置する。

(関心・意欲・態度)

- ・学生の主体的な学びを引き出すために、ニセコ国際研修、短期語学研修、インターンシップ(国内外)、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図る。

②教育方法

- ・人材養成の目的に則して、講義形式の授業の他に、学生の主体的な学びを引き出すために、少人数授業、習熟度別授業、双方向的・学生参加型授業、課題解決・探求型授業、ICTを活用した授業などのアクティブ・ラーニングを実践する。
- ・研修(国内外)、海外留学、インターンシップ(国内外)、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図るなど、教育方法の質的転換を図る。
- ・外国人教員による授業の比率を高め、外国語学修環境を提供する。
- ・学生面談などの授業時間外での学修指導の充実を図る。

③教育評価

- ・シラバスに明示された各科目の到達目標、学修内容、準備学修の内容・時間、成績評価の方法・基準に基づいて客観的に評価する。
- ・海外留学・研修、インターンシップは研修地での評価にもとづき単位認定を行う。

国際学部における教育課程は、(1)教養科目、(2)専門科目から構成されている。教育内容はカリキュラムポリシーの中で対応させている「教育課程の基本方針」(先述)の中で示されている。

教育課程の編成内容

国際学部各学科の具体的な教育課程の編成内容は学生便覧の「教育課程の構成と概要」に明示されている。

また、科目区分、必修・選択の別、単位数、配当年次および学期を、北海道文教大学学則、別表第1に明示している。

国際学部各学科の教育課程は、(1)教養科目(2)専門科目から構成されている。

国際学部において教養教育は大学での学修における基盤の涵養と、社会に出たのちを見

据えた教養に主眼をおいている。そこで、教養科目は「全学共通科目」、「学部共通科目」「キャリア形成（社会人基礎力）」の3分野から構成されており、それぞれの分野の内容は以下のようにになっている。

「全学共通科目」は、人生の学びの意味、国家制度の基本、健康、教養人そして職業人として欠かせない情報処理と分析能力を養う。「学部共通科目（共通外国語）」においては、英語と中国語の言語運用能力の向上を目指し、さらには教養としての副言語（フランス語、朝鮮語、ロシア語）を学習する。「学部共通科目（北海道スタディーズ）」では、自然環境、社会、文化、歴史を通して、地域と世界のつながりや地域活性化における産業のあり方などを学習する。「キャリア形成（社会人基礎力）」では、キャリア教育やビジネス・スキルなどを通して社会人基礎力をつけ、ビジネスや社会貢献、国際貢献などに役立つレベルの日本語運用能力を身につける。

また各学科の専門科目と内容は以下のようにになっている。

国際教養学科の専門科目は国際教養科目、キャリア形成（実用日本語）、語学研修、卒業研究で構成されている。

国際教養科目（国際教養英語）においては、大学の専門分野の学習や研究のための学術目的の英語を「国際教養科目」領域の「国際教養英語」科目群において学ぶ。国際教養科目（国際政治経済）ではグローバル化の中で変化し続ける社会状況の課題を、政治と経済を中心とした社会科学の多角的視点から分析し理解する力を養う。国際教養科目（国際地域研究）では、世界の各地域や各国の社会、文化、政治に関する知識を日本と密接な関係にある諸地域や国々の知識から、世界の多様性と豊かさへの教養を学ぶ。キャリア形成（実用日本語）では、職業人としての基礎となる母語である日本語の言語能力を養う。語学研修Ⅰ～Ⅳは、必修の短期語学研修、私費留学、交換留学とは別に本学と協定する海外の教育機関において、言語に関する所定の受講修了時間数または取得単位を本学での単位として認定するものである。卒業研究では、多様な社会文化的背景を持つ留学生と日本人学生とが、協働して課題発見・解決していく能力を養成する学修機会を設けている。

国際コミュニケーション学科の専門科目は国際コミュニケーション科目、キャリア形成（実用日本語）、語学研修、卒業研究で構成されている。

国際コミュニケーション科目では、ビジネス場面や観光分野での言語使用に焦点をあてた英語と中国語を学習し、身につけた外国語能力を実際の社会で実践する力を養う。キャリア形成（実用日本語）では、職業人としての基礎となる母語である日本語の言語能力を養う。語学研修Ⅰ～Ⅳは、必修の短期語学研修、私費留学、交換留学とは別に本学と協定する海外の教育機関において、言語に関する所定の受講修了時間数または取得単位を本学での単位として認定するものである。卒業研究では、多様な社会文化的背景を持つ留学生と日本人学生とが、協働して課題発見・解決していく能力を養成する学修機会を設けている。

（資料 2022 学生便覧 p. 96 および p. 99）

国際教養学科のカリキュラムポリシーに対応している「教育課程の基本方針」と、ディプロマポリシーが対応している項目は、以下の表に示すとおり十分に整合しているといえる。

教育課程の編成・実施方針(カリキュラムポリシー)	学位授与方針 (ディプロマポリシー)
英語をはじめとする外国語教育の強化	学術目的の言語使用に主眼をおいた英語及び日本語の高度な運用能力(技能・表現力)を身につけている。
豊かな教養と異文化理解の精神を身につける	北海道、日本及び世界諸地域の課題とその分析や解決を考 えることのできる、世界諸地域の言語、政治、経済、社 会、文化等の国際教養を身につけている。 世界と繋がるために地域社会を理解し、その活性化に向け て発信できる国際感覚を身につけている。
コミュニケーション能力の向上	グローバル社会の中で、世界の人々と共生・協働すること を可能とする国際性や共感力を備えている。
課題解決能力の養成	北海道、日本及び世界諸地域の課題に対応できる情報処理 や分析の能力、論理的・批判的な思考や判断をする能力を 身につけている。

国際コミュニケーション学科のカリキュラムポリシーに対応している「教育課程の基本方針」と、ディプロマポリシーが対応している項目は、以下の表に示すとおり十分に整合しているといえる。

教育課程の編成・実施方針(カリキュラムポリシー)	学位授与方針 (ディプロマポリシー)
英語をはじめとする外国語教育の強化	学術目的の言語使用に主眼をおいた英語及び日本語の高度な運用能力を身につけている。
豊かな教養と異文化理解の精神を身につける	世界と地域の視点から、自然環境、社会、文化、歴史等につ いての高度な専門知識を身につけている。 世界各地域の活性化につなげるための異文化コミュニケー ション能力を身につけている。
コミュニケーション能力の向上	世界各地域の活性化につなげるための異文化コミュニケー ション能力を身につけている。 グローバル社会の中で、世界の人々と共生・協働すること を可能とする国際性や柔軟で前向きなコミュニケーション 能力を備えている。

課題解決能力の養成	北海道、日本及び世界諸地域の課題に対応できる情報処理や分析の能力、論理的・批判的な思考や判断をする能力を身につけている。 世界と繋がるために地域社会を理解し、その活性化に向けて発信できる国際感覚を身につけている。
-----------	---

国際学部の各学科のカリキュラムポリシーは大学ホームページの大学概要など検索しやすい場所に公開しており、広く社会に公表されている。

点検・評価項目③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

<p>評価の視点1 各学部・研究科において適切に教育課程を編成するための措置</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の編成・実施方針と教育課程の整合性 ・教育課程の編成にあたっての順次性及び体系性への配慮 ・単位制度の趣旨に沿った単位の設定 ・個々の授業科目の内容及び方法 ・授業科目の位置づけ（必修、選択等） ・各学位課程にふさわしい教育内容の設定 <p style="text-align: center;">＜学士課程＞初年次教育、高大接続への配慮、教養教育と専門教育の適切な配置等</p> <p>評価の視点2 学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施</p>

国際学部の各学科の教育課程は、(1)教養科目(2)専門科目から構成されている。

国際学部において教養教育は大学での学修における基盤の涵養と、社会に出たのちを見据えた教養に主眼をおいている。そこで、教養科目は「全学共通科目」、「学部共通科目」「キャリア形成（社会人基礎力）」の3分野から構成されている。

全学共通の教養科目としては「総合教養講座」「日本国憲法」「生涯スポーツⅠ」「生涯スポーツⅡ」「情報処理」「統計の基礎」がある。このうち「総合教養講座」は各学部・学科の専門的知識の学習に続く橋渡しを行い、学生のモチベーションを啓発し、豊かな人間性を養うことに主眼をおいている。「生涯スポーツⅠ」「生涯スポーツⅡ」はどの分野においても体力が基本であるため、スポーツ活動の意義、生涯にわたってスポーツを継続していくための基礎知識を養っている。「情報処理」は社会に出て最低限必要となるコンピュータリテラシーを養成し、「統計の基礎」はデータを分析しその統計学的根拠を示す力を育成する。これ

らはいずれも社会に出て必須となるものであり、学士教育に相応しいものである。

「学部共通科目」は「共通外国語」科目と「北海道スタディーズ」科目から構成される。

「共通外国語」科目においては、英語と中国語の言語運用能力の向上を目指し、さらには教養としての副言語（フランス語、朝鮮語、ロシア語）を学習する。学部共通科目（北海道スタディーズ）では、自然環境、社会、文化、歴史を通して、地域と世界のつながりや地域活性化における産業のあり方などを学習する。

また「キャリア形成（社会人基礎力）」ではキャリア教育やビジネス・スキルなどを通して社会人基礎力をつけ、ビジネスや社会貢献、国際貢献などに役立つレベルの日本語運用能力を身につける。

専門科目は、学部共通の「キャリア形成（実用日本語）」、「語学研修」、「卒業研究」、および各学科にそれぞれ配置された「国際教養科目」（国際教養学科）／「国際コミュニケーション科目」（国際コミュニケーション学科）のそれぞれ4分野からなる。

このうちキャリア形成（実用日本語）では、職業人としての基礎となる母語である日本語の言語能力を養うことを目的とし、1年生で「日本語表現技法Ⅰ（プレゼンテーション）」および「日本語表現技法Ⅱ（文章表現）」を必修科目として配置するとともに、選択科目として「世界の言語と日本語」「日本語の表記と語彙」（1年生）・「日本語コミュニケーション技法」「日本語学」「日本語と日本文化」（2年生）・「日本語ビジネスライティング」「現代日本語論」「日本語教育法Ⅰ」「日本語教育法Ⅱ」（3年生）・「日本語教育演習」（4年生）を配置し、学生がそれぞれの興味と進路に沿って段階的に知識・能力を身につけていくことができるようなカリキュラム構成となっている。

語学研修Ⅰ～Ⅳは、必修の短期語学研修、私費留学、交換留学とは別に本学と協定する海外の教育機関において、言語に関する所定の受講修了時間数または取得単位を本学での単位として認定するものである。

卒業研究では、多様な社会文化的背景を持つ留学生と日本人学生とが、協働して課題発見・解決していく能力を養成する学修機会を設けている。

国際教養学科の国際教養科目は、「国際教養英語」「国際政治経済」「国際地域研究」の3分野からなる。

「国際教養英語」科目群にて、大学の専門分野の学習や研究のための学術的な場面でも英語を用いることができるような言語能力の向上を図る。

「国際政治経済」科目群に属する国際関係論、開発援助論などの科目を通して身につけさせる。また、世界を分析する基礎である、政治学、経済学、社会学などにまたがる多角的な視点と発想法を修得させることも目標とする。

また「国際地域研究」科目群に属する国際地域文化論、東アジア地域論、アメリカ研究などの科目を通して身につけさせる。これらを通して、日本と密接な関係にある諸地域や国々の知識から、世界の多様性と豊かさへの教養を修得する。

国際コミュニケーション学科の国際コミュニケーション科目は、「言語プロフェッショナル科目」と「国際・異文化コミュニケーション科目」の2分野からなる。

「言語プロフェッショナル科目」では、共通外国語科目として履修する「中国語入門Ⅰ～Ⅲ」（科目名で示されているローマ数字はおおよそ各年次・開講期からの積み上げ科目であることを示している）および「総合中国語Ⅰ～Ⅳ」「中国語コミュニケーション」「中国語リスニング」に加え、選択科目として「初級中国語Ⅰ～Ⅲ」「中国語リーディング」「中国語ライティング」「メディア中国語」を加え（さらには「国際・異文化コミュニケーション科目」でも複数の中国語科目を設置している、後述）、複数の言語における高い外国語コミュニケーション能力の育成を図っている。英語科目についても「Basic Oral Communication」「English Written CommunicationⅠ」「English for workplace communicationⅠ」などの英語コミュニケーション科目を必修とするほか、「TOEIC PreparationⅠ、Ⅱ」などの検定準備科目、「English LiteratureⅠ、Ⅱ」などの歴史・文化科目、「英語通訳法Ⅰ、Ⅱ」「英語翻訳法」「日英対照言語学」などの日本語との関連科目なども配置し、国内外・地域の発展に貢献できるグローバル人材の育成を目指している。

また「国際・異文化コミュニケーション科目」では、「コミュニケーション学概論」「国際コミュニケーション論」を必修科目としてそれぞれ1・2年次配当科目とするともに、「国際コミュニケーション演習Ⅰ、Ⅱ」という演習科目において、講義科目（上記必修科目および「異文化接触論」「異文化理解論」「異文化コミュニケーション論」「異文化ビジネスコミュニケーション」など）において身につけた知識を実践的に学習する科目を配置している。また先述したとおり、中国語についても「観光中国語」「ビジネス中国語」「エアポート中国語」などの科目を2年次後期以降に配置しており、中国語の基礎を学修した学生が自身の興味と進路に沿って履修できる体制を整えている。

また、全科目に対して体系マップを作成しナンバリングによる体系化を行っている。

なお、初年次教育・高大連携に配慮した教育については、学部共通である「キャリア形成（実用日本語）」において「日本語表現技法Ⅰ（プレゼンテーション）」「日本語表現技法Ⅱ（文章表現）」を設け、大学生としての心構えから、大学生としての勉強の仕方や、レポートのまとめ方、ゼミの発表の仕方などを系統的にかつ実践的に学ばせている。

また2018年度4月から学士課程におけるカリキュラムマップをシラバスの冒頭に提示した。カリキュラムマップはカリキュラム全体の構成を把握するためのもので、年次進行之したがって関連のある科目を近い位置に表示するとともに、それぞれの科目が何を学ぶための科目なのか、どの学位授与方針（ディプロマポリシー）を達成するための科目なのかを示されている。さらに、専門科目や専門基礎科目と関連のある教養科目も示されている。これにより、教育の目的や課程修了時の学習成果と、各授業科目との関係が明確に示されている。2022年度より、シラバスにおいても、「授業の位置づけ」項目においてカリキュラム

マップを元にして各科目がディプロマポリシーのどの項目を実現するためのものであるかということを示し、履修者に示している。

点検・評価項目④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

評価の視点1 各学部・研究科において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置

各学位課程の特性に応じた単位の実質化を図るための措置（1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定等）

シラバスの内容（授業の目的、到達目標、学習成果の指標、授業内容及び方法、授業計画、授業準備のための指示、成績評価方法及び基準等の明示）及び実施（授業内容とシラバスとの整合性の確保等）

学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法

<学士課程>

授業形態に配慮した1授業あたりの学生数

適切な履修指導の実施

大学の全学部および全研究科においてシラバス中の「授業の方法」において、①プレゼンテーションの方法、②授業形態、の他に③アクティブラーニングの取り入れの状況を記述するようになっている。また、2018年度から「課題に対するフィードバックの方法」欄が独立した項目となりフィードバックを学生に返すことにより学生が意欲をもてるように配慮している。国際学部においては、学外実習や留学科目などが必修科目として多数設定されており、学生の主体的な参加が必然的に求められている。

国際学部各学科のカリキュラムポリシーに従って教養科目、専門科目の教育方法は以下のようにしている。

はじめに国際学部共通科目について述べる。

教養科目のうち「生涯スポーツⅠ、Ⅱ」および必修外国語科目「EnglishⅠ、Ⅱ」「中国語入門Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」は演習形式をとっている。これらは言語、スポーツの技術の修得を必要とする科目であり、それ以外の教養科目は講義形式をとっている。ただし「ニセコ国際研修」については実習科目であり、講義科目とはなっていない。

専門科目では学部共通科目、各学科専門科目ともにそれぞれの科目において言語実践的な技能・能力だけではなく、文化等の多角的な視点を修得させることを目的とする科目であるため、グループワーク等を中心に学生が主体となって動く授業であっても原則的にはす

べて「講義科目」となっている。(専門科目で「演習」形式の授業として位置づけられているのは「日本語教育演習」(学部共通科目)・「国際コミュニケーション演習Ⅰ、Ⅱ」(国際コミュニケーション学科科目)・「卒業研究プロジェクトⅠ、Ⅱ」である。)

修得すべき学習成果を示すために、資格取得および卒業に必要な単位数、選択科目の履修方法等を『学生便覧』の「履修の方法」において明示している。

大学全体の方針により履修登録単位数の上限は、国家資格等関係科目、教職科目を除き44単位以内、各学期26単位以内となっている。

さらに、学科の学生・教員が全員出席する各学期はじめのオリエンテーションで、学年ごとに学科の基本的な教育目標とその達成までに必要な諸事項を『学生便覧』を用いて詳細にわたって説明し、学生間・教員間に誤解等がないように配慮している。また必要に応じて適宜、一斉メールなどの形で周知を徹底させることもある。

指導教員制度として大学の全学科においてクラス担任、アドバイザーを設けるとともに、週2コマ以上のオフィスアワーを設けている。欠席が続く学生については、学科会議などの共通の場で確認しあい、アドバイザーから適宜連絡を取り、当該学生の学習状況や生活状況などを確認しながら指導を行うことになっている。

国際学部、とりわけ国際コミュニケーション学科においては、語学教育を教育活動の中心としているため、必修科目である英語・中国語はもとより、選択科目においても可能な限り少人数クラスを設定し、複数クラス展開を行っている。授業内容についてもグループワーク・プレゼンテーションが中心となる科目のほか、学外学習を行う授業自体も多く、学生の興味をひきながら様々なことを体験のもとに身につけることのできる科目を多く配している。

さらに課題提出・返却をはじめ、参考資料の提示などにおいても本学全体で利用しているGoogle workspace, Google classroomを積極的に活用した授業を展開している。

点検・評価項目⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

評価の視点1 成績評価及び単位認定を適切に行うための措置

- ・ 単位制度の趣旨に基づく単位認定
- ・ 既修得単位の適切な認定
- ・ 成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置
- ・ 卒業・修了要件の明示

評価の視点2 学位授与を適切に行うための措置

- ・ 学位論文審査がある場合、学位論文審査基準の明示

- ・学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置
- ・学位授与に係る責任体制及び手続の明示
- ・適切な学位授与

国際学部の成績評価は以下の「大学全体の成績評価の方法・基準」で示した評価の方法・基準に沿って成績を評価している。

また、シラバスに各教科について毎回の準備学習と事後学習を明示し、単位の実質化をはかっている。既修得単位の認定も大学全体の基準に従っている。

【大学全体の成績評価の方法・基準】成績評価は本学の履修規程に基づき、各教員が事前にシラバス上で学生に公表した評価方法によって成績評価と単位認定を行っている。全学において授業科目の成績評価は、100点満点の60点以上を合格とし、AA(秀)(90点以上)、A(優)(80点以上90点未満)、B(良)(70点以上80点未満)、C(可)(60点以上70点未満)となっている。

定期試験期間中、病欠、公欠等の理由で受験できなかった場合に追試験を課している。また、評価の結果合格点には達していないが一定の条件を満たしている者をいったんDH(不可保留)とし、補習等を経て当該学期内に再評価をする制度が設けられている。なお、DHの後再評価の結果合格となった場合の成績評価はCとなる。

履修した科目の成績が合格となった場合は、定められた単位数を履修者に与えている。なお、成績評価に疑義のある場合は、文書による疑義申し立てと担当教員からの文書による回答をすることを制度化し、学生と教員が相互に成績評価の適正性を確認している。

授業科目は、「講義」、「演習」、「実習・実技」に大別されており、1単位を修得するための時間は以下の表のようになっている。よって、いずれも1単位の授業科目に45時間の学修を標準とする大学設置基準の主旨に従っている。なお、本学では授業1回90分を2時間と計算する。2単位の講義形式の授業科目であれば15回で授業時間が30時間、したがって自習時間は1回4時間×15回=60時間が必要となると指導している。学生の予習・復習時間を確保するため、シラバスには毎回の授業ごとに準備学習と事後学習の項目を設けて学生が自習時間にすべきことをきめ細かく指示し、単位の実質化をはかっている。

授業形態	授業時間	自習時間	計
講義	15時間	30時間	45時間
演習	30～15時間	15～30時間	
実習・実技	45～30時間	0～15時間	

本学では、他の大学又は短期大学を卒業または中途退学している者に対する既修得単位の認定を行っている。また、他大学や短期大学との協議に基づき当該他大学または短期大学での授業科目の履修で修得した単位を本学での修得単位として認めている。これらにより

与えることができる単位数は、編入学・転入学の場合を除き本学において修得したものとみなす単位数と合わせて 60 単位を超えないこととしている。

国際学部各学科においては交換留学等で修得した単位の互換については、「交換留学先が基本的に学科の認定した教育機関であること、単位互換にあたりそれぞれの授業内容を精査すること、さらには留学先の授業時間数および評価の証明書を必要とすること」と学科内で共有している。これらに基づき、学科会議および教授会を含む関係諸会議の議を経て認定される。

国際学部の学士（国際学）については、本学学則に基づき「本学に 4 年以上在学し、所定の単位を修得した者」について教授会の議を経て学長が卒業を認定し、学位を授与している。

国際学部各学科の卒業・修了の要件については、各年度に配布される学生便覧の「履修ガイド」の履修の方法において科目区分別の必要単位数、単位の組み合わせの要件を詳細に記載して学生に明示している。

点検・評価項目⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

評価の視点 1 各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定
評価の視点 2 学習成果を把握及び評価するための方法の開発
《学習成果の測定方法例》・アセスメント・テスト・ルーブリックを活用した測定・学習成果の測定を目的とした学生調査・卒業生、就職先への意見聴取

国際学部では、大学全体同様、学生の学習成果を測定するための指標である GPA（Grade Point Average）を導入している。

英語教育については、毎年 2 回、全学生に英語プレースメントテストを受験させ、各年度の学生達の語学力を客観的に測定している。

また各種資格試験や外国語試験の受験を奨励し、補助を行っている。

点検・評価項目⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点 1 適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価
・学習成果の測定結果の適切な活用
評価の視点 2 点検・評価結果に基づく改善・向上

教育課程及びその内容、方法の適切性は、各学科の学科会議の中で、教務関連事項として抽出されている。

カリキュラム改訂が必要となった場合、学部においては原案が学科会議で作成され、教務委員会、教授会の議論を経て決定される。カリキュラム改訂にともなう学則の変更は教授会の議により原案を作成し、理事会の議を経て行われている。

学習成果の測定結果については、年度当初に行う英語プレースメントテストの結果に基づきクラス分けを行うとともに、後期当初に行う同様のテストにおける成績の測定を行い、指導に役立っている。

また全学で行われている FD 研修会、および授業評価アンケートおよび卒業生アンケートを参考にして、よりよい授業を行うことができるよう、取り組みを行っている。

(2) 長所・特色

国際学部では、本学他学科と同様、前期・後期のはじめの授業開始前の時期に、学年ごとにオリエンテーションを行い、全体的な履修指導を行うとともに、アドバイザーを通じた履修登録前の履修指導を個別に行っている。その際、個別科目の履修にとどまらず、全体的な履修計画を学生に意識させながら、各科目の意義・役割についてある程度の説明を行っている。(具体的なディプロマポリシーとの関係や、他の科目との関連性の詳細についてはシラバスに記載されている。)

また上述のとおり、授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うため、少人数クラス・複数クラス展開などを取り入れ、Google workspace, Google classroom を積極的に利用したクラス活動を行なっている。

またこちらも上述のとおり、学外実習を多く取り入れた授業を複数で展開し、学生が自分から体験することを通じて自らの学びを深めることができるカリキュラムとなっている。

また各年度の初めに TOEIC を受験し、その成績に基づいて英語クラスのクラス分けを行い、少人数制クラスを設定するとともに、能力別クラス分けを行っている。国際コミュニケーション学科では中国語検定の受験支援を行い、中国語教育の成果を見るとともに、翌年以降の教育方法の点検を行っている。

(3) 問題点

学科別オリエンテーションへの欠席者についてしっかりと情報が行き渡るよう、何らかの対策が望まれる。現在のところはアドバイザー教員のところに行って書類等を受け取るよう指示しているが、一部の学生についてはそのまま授業開始を迎えることになっている。

またプレースメントテスト等に利用している TOEIC および中国語検定について、より詳細な分析を行って日常の教育に還元する必要がある。

基準5 学生の受け入れ

点検・評価項目①学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

評価の視点1 学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表

評価の視点2 下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定

- ・入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像
- ・入学希望者に求める水準等の判定方法

学部学科毎にアドミッション・ポリシーを定め、大学ホームページ（資料 学生募集要項 2019）及び「学生募集要項」で公表している。各学科共に1. 本学科の教育目標 2. 本学科の教育方針 3. 本学科の求める学生像 4. 入学前指導 について明らかにしている。なお、障がいのある学生の受け入れについて、国際学部は大学全体の受け入れ方針に従っている。

【国際学部各学科アドミッション・ポリシー（本学科の求める学生像）】

○国際教養学科

国際教養学科はグローバル化が進む社会において不可欠な国際的な視点から、グローバル社会の課題を解決するとともに、北海道を愛し、世界に発信できる意欲をもつ次のような人材を求めます。

（知識・技能）

- ・英語の高等学校卒業相当の知識を有している人。
- ・国際的な事象を理解するための社会の高等学校卒業相当の知識を有している人。
- ・基礎・基本的な知識・技能の習得するための勉学の習慣を持っている人。

（思考・判断・表現）

- ・国際社会で活躍するための基礎となる知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を持っている人。

（関心・意欲・態度）

- ・外国語による世界理解と自己表現が可能な言語能力の獲得に、強い意欲を持っている人。
- ・北海道と世界に強い関心を持ち、基礎学力と論理的思考を持ち、課題に取り組む意欲を持っている人。
- ・自らの将来を、海外生活や地域の現場で協働する意欲を持っている人。

○国際コミュニケーション学科

国際コミュニケーション学科はグローバル化が進む社会において不可欠な国際的な視点から、グローバル社会の課題を解決するとともに、北海道を愛し、世界に発信で

きる意欲をもつ次のような人材を求めます。

(知識・技能)

- ・英語の高等学校卒業相当の知識を有している人。
- ・基礎・基本的な知識・技能の習得するための勉学の習慣を持っている人。

(思考・判断・表現)

- ・国際社会で活躍するための基礎となる知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を持っている人。

(関心・意欲・態度)

- ・外国語による世界理解と自己表現が可能な言語能力の獲得に、強い意欲を持っている人。
- ・北海道と世界に強い関心を持ち、基礎学力と論理的思考を持ち、課題に取り組む意欲を持っている人。
- ・自らの将来を、海外生活や地域の現場で協働する意欲を持っている人。

本学ホームページ「3つのポリシー」の「アドミッションポリシー」に「学力の3要素を踏まえた判定」の項目があり、

入学試験においては高等学校までに培われた学力の3要素に鑑み、各試験区分において求めた提出書類・面接・小論文・各教科目試験等の総合評価をもって合否を判定しています。

と明記されている。

国際学部の各学科でアドミッション・ポリシーをカリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに対応させた表を示す。国際学部各学科におけるアドミッション・ポリシーは以下の表のように、カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに対応しており整合している。

・国際教養学科

学生の受け入れ方針 (アドミッション・ポリシー)	教育課程の編成・実施方針 (カリキュラムポリシー)	学位授与方針 (ディプロマポリシー)
英語の高等学校卒業相当の知識を有している人。	国際教養学科は「グローバル人材」と「グローバル人材」の素養を併せ持つ「国際教養人」の育成のため、「全学共通科目」、「学部	学術目的の言語使用に主眼をおいた英語及び日本語の高度な運用能力を身につけている。

	<p>共通科目」、「国際教養科目」、「キャリア形成」、「語学研修」、「卒業研究」を編成します。</p> <p>・英語で学習するための「国際教養英語科目」、世界の現象を社会科学の視点で分析する「国際政治経済科目」、世界の各地域・各国の多様性を習得する「国際地域研究」を配置する。</p> <p>「教育課程の基本方針」①②③に対応。</p>	
<p>・基礎・基本的な知識・技能の習得するための勉学の習慣を持っている人。</p>	<p>・外国人教員による授業の比率を高め、外国語学修環境を提供する。</p> <p>対応する科目を設定。</p> <p>「教育課程の基本方針」①②③④</p>	
<p>・国際社会で活躍するための基礎となる知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を持っている人。</p>	<p>学生の主体的な学びを引き出すために、ニセコ国際研修、短期語学研修、インターンシップ(国内外)、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図る。</p> <p>・人材養成の目的に則して、講義形式の授業の他に、学生の主体的な学びを引き出すために、少人数授業、習熟度別授業、双方向的・学生参加型授業、課題解決・探求型授業、ICTを活用した授業などのアクティブ・ラーニングを実践する。</p> <p>・社会科学と地域研究への学びを導入する「国際政治経済科目」「国際地域研究科目」の2つの科目群を開設する。</p> <p>対応する科目を設定。</p> <p>「教育課程の基本方針」①②③に</p>	<p>世界と地域の視点から、自然環境、社会、文化、歴史等についての高度な専門知識を身につけている。</p> <p>世界各地域の活性化につなげるための自立的思考力を身につけている。</p>

	対応。	
・外国語による世界理解と自己表現が可能な言語能力の獲得に、強い意欲を持っている人。	・アカデミックな目的の探究を多能とする「国際教養英語科目」を配置する。 「教育課程の基本方針」①②③④	学術目的の言語使用に主眼をおいた英語及び日本語の高度な運用能力を身につけている。
・北海道と世界に強い関心を持ち、基礎学力と論理的思考を持ち、課題に取り組む意欲を持っている人。	・地元地域について学び、地域振興や地域貢献、またキャリア意識にもつなげる北海道スタディーズ科目群を配置する。 学生の主体的な学びを引き出すために、ニセコ国際研修、短期語学研修、インターンシップ(国内外)、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図る。 対応する科目を設定。「教育課程の基本方針」①②③に対応。	北海道、日本及び世界諸地域の課題に対応できる情報処理や分析の能力、論理的・批判的な思考や判断をする能力を身につけている。 世界と繋がるために地域社会を理解し、その活性化に向けて発信できる国際感覚を身につけている。
・自らの将来を、海外生活や地域の現場で協働する意欲を持っている人。	学生の主体的な学びを引き出すために、ニセコ国際研修、短期語学研修、インターンシップ(国内外)、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図る。 ・世界中のパートナーと協働できるための世界の各地域・各国の事情の理解力養成のための「国際地域研究科目」を配置する。 ・世界の課題・解決を自らの力で分析し思考・判断することができる「国際政治経済科目」を配置する。 ・人材養成の目的に則して、講義	世界各地域の活性化につなげるための異文化コミュニケーション能力を身につけている。 グローバル社会の中で、世界の人々と共生・協働することを可能とする国際性や柔軟で前向きなコミュニケーション能力を備えている。

	<p>形式の授業の他に、学生の主体的な学びを引き出すために、少人数授業、習熟度別授業、双方向的・学生参加型授業、課題解決・探求型授業、ICTを活用した授業などのアクティブ・ラーニングを実践する。</p> <p>対応する科目を設定。</p> <p>「教育課程の基本方針」①②③④</p>	
--	--	--

・国際コミュニケーション学科

学生の受け入れ方針 (アドミッション・ポリシー)	教育課程の編成・実施方針 (カリキュラムポリシー)	学位授与方針 (ディプロマポリシー)
英語の高等学校卒業相当の知識を有している人。	<p>国際コミュニケーション学科は「グローバル人材」と「グローバル人材」の素養を併せ持つ「国際教養人」の育成のため、「全学共通科目」、「学部共通科目」、「国際コミュニケーション科目」、「キャリア形成」、「語学研修」、「卒業研究」を編成します。</p> <p>・ビジネスや観光場面を中心とした言語使用に焦点をあてた英語と中国語の運用能力の養成のための「言語プロフェッショナル科目」を配置する。</p> <p>「教育課程の基本方針」①②③に対応。</p>	<p>学術目的の言語使用に主眼をおいた英語及び日本語の高度な運用能力を身につけている。</p>
・基礎・基本的な知識・技能の習得するための勉学の習慣を持っている人。	<p>・外国人教員による授業の比率を高め、外国語学修環境を提供する。</p> <p>対応する科目を設定。</p> <p>「教育課程の基本方針」①②③④</p>	

<p>・国際社会で活躍するための基礎となる知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を持っている人。</p>	<p>学生の主体的な学びを引き出すために、ニセコ国際研修、短期語学研修、インターンシップ(国内外)、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図る。</p> <p>・人材養成の目的に則して、講義形式の授業の他に、学生の主体的な学びを引き出すために、少人数授業、習熟度別授業、双方向的・学生参加型授業、課題解決・探求型授業、ICTを活用した授業などのアクティブ・ラーニングを実践する。</p> <p>・異文化理解力と異文化コミュニケーション力を高める「国際・異文化コミュニケーション科目」の2つの科目群を開設する。</p> <p>対応する科目を設定。</p> <p>「教育課程の基本方針」①②③に対応。</p>	<p>世界と地域の視点から、自然環境、社会、文化、歴史等についての高度な専門知識を身につけている。</p> <p>世界各地域の活性化につなげるための異文化コミュニケーション能力を身につけている。</p>
<p>・外国語による世界理解と自己表現が可能な言語能力の獲得に、強い意欲を持っている人。</p>	<p>・ビジネスや観光場面を中心とした言語使用に焦点をあてた英語と中国語の運用能力の養成のための「言語プロフェッショナル科目」を配置する。</p> <p>・異文化理解力と異文化コミュニケーション力を高める「国際・異文化コミュニケーション科目」の2つの科目群を開設する。</p> <p>対応する科目を設定。</p> <p>「教育課程の基本方針」①②③④</p>	<p>学術目的の言語使用に主眼をおいた英語及び日本語の高度な運用能力を身につけている。</p>

<p>・北海道と世界に強い関心を持ち、基礎学力と論理的思考を持ち、課題に取り組む意欲を持っている人。</p>	<p>・地元地域について学び、地域振興や地域貢献、またキャリア意識にもつなげる北海道スタディーズ科目群を配置する。</p> <p>学生の主体的な学びを引き出すために、ニセコ国際研修、短期語学研修、インターンシップ（国内外）、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図る。</p> <p>対応する科目を設定。「教育課程の基本方針」①②③に対応。</p>	<p>北海道、日本及び世界諸地域の課題に対応できる情報処理や分析の能力、論理的・批判的な思考や判断をする能力を身につけている。</p> <p>世界と繋がるために地域社会を理解し、その活性化に向けて発信できる国際感覚を身につけている。</p>
<p>・自らの将来を、海外生活や地域の現場で協働する意欲を持っている人。</p>	<p>学生の主体的な学びを引き出すために、ニセコ国際研修、短期語学研修、インターンシップ（国内外）、アウトドア・ツーリズムなどの体験的な学修活動の充実を図る。</p> <p>・ビジネスや観光場面を中心とした言語使用に焦点をあてた英語と中国語の運用能力の養成のための「言語プロフェッショナル科目」を配置する。</p> <p>・異文化理解力と異文化コミュニケーション力を高める「国際・異文化コミュニケーション科目」の2つの科目群を開設する。</p> <p>・人材養成の目的に則して、講義形式の授業の他に、学生の主体的な学びを引き出すために、少人数授業、習熟度別授業、双方向的・学生参加型授業、課題解決・探求型授業、ICTを活用した授業などのアクティブ・ラーニングを実践する。</p> <p>対応する科目を設定。</p>	<p>世界各地域の活性化につなげるための異文化コミュニケーション能力を身につけている。</p> <p>グローバル社会の中で、世界の人々と共生・協働することを可能とする国際性や柔軟で前向きなコミュニケーション能力を備えている。</p>

	「教育課程の基本方針」①②③④	
--	-----------------	--

点検・評価項目②学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

評価の視点 1 学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学者選抜制度の適切な設定

2020年度の国際学部の入学者選抜（2021年度入学生向け）については、大学全体の入試制度に随う形で、従来の入試制度による入学者選抜の形を維持しながら新しい特色のある選抜方法として「スポーツ大好き選抜・北海道食の王国選抜」を新設した。また、大学入試センターが大学入学共通テストとなったことにもない、従来の大学入試センター試験利用選抜を大学入学共通テスト利用選抜に変更した。続く2021年度（2022年度入学生向け）は各選抜を一部統合し、学校推薦型選抜（一般・指定校、特待生）、総合型選抜（プレゼンテーション総合選抜、ディスカバリー育成型選抜、スポーツ大好き選抜、北海道食の王国選抜、一般選抜、大学入学共通テスト利用選抜、特別選抜を実施するとともに、前年度の入学者・受験者数頭を考慮し各選抜における募集人数の変更を行った。2022年度（2023年度入学生向け）選抜においても選抜時期や募集人数を調整するとともに、新たに全学的に「運動選手自己アピール型選抜」を新設した。

学校推薦型選抜は「一般・指定校」と「特待生」選抜に分け、一般区分の他に指定校区分を設けるとともに特待生選抜も設けた。指定校枠では本学入学の実績のある高等学校に対して一般区分で必要な評定値基準(3.5以上)を免除している。

また特待生選抜は、「人物・成績共に優れ、特に本学での強い学修意志を示した合格者に対し、4年間にわたり授業料を半額に減免する」ものであり、昨年度と同様に学校推薦型選抜の選抜方法に準じつつ評定値基準を4.0以上として特待生選抜とした。

総合型選抜はプレゼンテーション型の選抜とディスカバリー育成型選抜・スポーツ大好き選抜・北海道食の王国選抜が統合された。

プレゼンテーション総合選抜は「世界とわたし」というテーマで3分のプレゼンテーションを行い、その後20分程度の面談を行うという形式で、国際学部としては3度の選抜を行った。

ディスカバリー育成型選抜は入学前の年度の夏から本学の教員や職員が受験生に対して

本学の入学基準に到達できるように大学進学に対する動機付けやプレゼンテーションの仕方等を指導する育成型の入試で、今年度も実施した。

新設された「運動選手自己アピール型選抜」は、野球及び女子アイスホッケーに特化した新しい選抜方法で、国際学部として今後、スポーツにも国際的な視点が必要となってくることなどを考慮し実施された。

スポーツ大好き選抜・北海道食の王国選抜は昨年度から新設された。これは所属学科の専門性に加えて「スポーツ」「北海道の食」にフォーカスし、それぞれの分野における学科内のスペシャリストとともに未来の価値を創造できる人材を募集する選抜で、今年度も実施された。

一般選抜はA期、B期を実施した。このうち、A期は2月初めに3科目型・2科目型を2日にわたって実施し、受験生はいずれか、または両方を受験できる。また、B期は3月中旬に2科目型・小論文型として実施した。A期とB期は今年度も人間科学部の全学科で実施した。一般選抜B期の小論文型は、昨年度「C期」として実施されたものである。

大学入学共通テスト利用選抜は特別選抜（社会人・帰国生等）、特別選抜（外国人留学生選抜）は昨年同様に前期・後期を実施した。

2022年度入学生向けの学生募集要項においても昨年度と同様に「アドミッションポリシー」を学科ごとに明記している。また、各選抜方法において学力の3要素を評価する書類・試験を明示し、それらの評価割合を明確に示している。これにより学力の3要素を踏まえた判定による多角的評価を行いモチベーションの高い学生が入学できるようにしている。

点検・評価項目③適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

評価の視点1 入学定員及び収容定員の適切な設定と在籍学生数の管理

<学士課程>

- ・入学定員に対する入学者数比率
- ・編入学定員に対する編入学生数比率
- ・収容定員に対する在籍学生数比率
- ・収容定員に対する在籍学生数の過剰又は未充足に関する対応

国際学部の入学定員と入学者及び入学定員に対する入学者比率の平均値は、下表のとおりである。

【入学定員に対する入学者比率】

学部学科	入学定員	入学者数					入学者計	入学者比率 (平均値)
		2021	2022	-	-	-		
国際教養学科	50	18	14	-	-	-	32	0.32
国際コミュニケーション学科	50	37	34	-	-	-	71	0.71
国際学部	100	55	48	-	-	-	103	0.515

国際学部の入学者比率は0.515であり、収容定員未充足の状態である。従来の外国語教育を発展継承する国際コミュニケーション学科の入学者比率が0.71であるのに対し、教育内容が新規となる国際教養学科の入学者比率が低調であり、教育方法や募集方法など、今後の是正が必要となっている。

(2) 長所・特色

本学のオープンキャンパスでは、両学部共に在學生を全面に打ち出した企画で、参加高校生の評価も高い。また、参加保護者は、我が子も先輩学生のような大学生になって欲しいと期待感に溢れ好評である。さらに、高校訪問では、新卒者の進路(就職先)や国家試験結果データ、在校生のGPA 成績データや就学状況、新入生の受験データ等を持参し、請求に応じ開示している。この資料は高校別となっており高等学校進路指導部から歓迎されている。

国際学部では、オープンキャンパスで本学部の魅力を伝えるだけでなく、教員自身が相当数の高校を実際に訪問し進路指導担当教諭と対話することや広告媒体などを用いた積極的な取り組みを行っている。また教員および在學生による、SNS等を通じた周知活動も積極的に行っており、今後も引き続きこれらの活動を行っていく予定である。

(3) 問題点

国際学部では、定員充足を満たすべく、各教員が積極的に高校への出張講義などを行ない、新入生を獲得することができたが、その数はまだまだ僅少で、本学・本学部の更なる周知が求められる。

また2022年度はオープンキャンパス参加者におけるリピーター率が低く、本学部・学科の魅力が伝えきれていない構成・内容になっていたと考えられるため、SNSでの発信を含めより一層の努力をする必要があると考えられる。

基準6 教員・教員組織

点検・評価項目④ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。

評価の視点1 ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動の組織的な実施

国際学部のFDセミナーは以下のように実施された。

題目：英語学を英語授業に活かす

日時：令和5年2月7日（火）10:00～11:00

場所：鶴岡記念講堂 2F 921 教室

講師：高橋保夫氏（国際コミュニケーション学科教授）

（2）長所・特色

研究分野の異なる講師の講演や研究・教育実践は、多様な教育・研究手法や異なった視点などの刺激を受け、各自の教育、研究指導に応用できる。

（3）問題点

特になし。

国際学部 自己点検評価実施委員

役名	氏名		
委員長	教授	宮本融	国際教養学科
委員	教授	小西 正人	国際コミュニケーション学科